

■長久手市みんなで作るまち条例施行記念シンポジウム

「さかそう ながくて じちのはな」

日時：2018年7月20日 19:00～21:00

場所：長久手市文化の家 風のホール

●市長挨拶

長久手市長 吉田 一平

皆さん、こんばんは。大変お疲れのところを、こうしてご出席いただきまして、ありがとうございました。

まず、開会にあたって少しお話をさせていただきます。



長久手の市民の思いが込められたまち詩（うた）について、皆さんもお聞きになったと思いますけども、市民の皆さん50人くらいが、みんなで作るまち条例をつくるためにお集まりになり、2年間にわたって、どうしようこうしようと言ったことを詩にしたものです。

日本では、明治維新以降、経済を膨張させ、人を増やしてきましたが、とにかく早く動くために、縦割りにし、分業化して、専門化して走ってきた時代が終わろうとしているわけです。

もっと人口が減少し、経済が縮小するときは、みんなで包括的に手を組み合って、一緒に手を組んでまちをつくっていかねばなりません。この詩には、とにかくみんなで声を聞こうじゃないか、対話しようじゃないか、ゆっくり行こうじゃないか、遠回りしようじゃないか、失敗してもいいじゃないかということがうたわれています。今日の市民のためではなくて、明日の市民に渡すため、この3年、5年、私たちが生きている間ではなくても、その次の10年、20年、30年に向かって、全く新しい時代が来る、その先駆けの歌のような気がします。

今日は、これから、次の世代にまちをどう渡していこうかということを考えられたらいいなと思っています。どうぞよろしく申し上げます。ありがとうございました。

●講演「共に生き 共に咲かせる 幸せの花」

小林 慶太郎 氏 (四日市大学副学長・(仮称)長久手市自治基本条例制定アドバイザー)

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました、四日市大学の小林と申します。

今日は、大きく三つのことをお話ししますが、まずは、この地域のことについて少し考えてみたいと思います。

1. 地域社会の多様化の時代を共に生きる

高齢化の進行や障がい者数の増加

先ほど市長からも、これからの時代に向けて、皆さん考えていきたいと思いますという話がありました。これからの時代、どんな時代がやってくるのだろうか。皆さんは耳にタコかもしれませんが、高齢化という話をよく耳にされるとと思います。

全体の人口に占めるお年寄りの比率が、じわじわ上がってきています。今、全国で人口の何人に1人がお年寄りかご存じですか。全国で言いますと、大体25%から30%の間くらいのところですよ。

これに比べると、長久手市は若い街で、まだまだ高齢化は心配ないというお声も、耳に入ってくるころなのですが、本当でしょうか。今から20年、30年先は、今、全国で言われているのと同じような状況が、長久手市にもやって来る、全国よりちょっと遅いだけのことなのです。

今、全国で高齢化、高齢化と散々言われていますけれど、やがて高齢化社会がやって来るよというのは、全国的に言っても、今から20~30年くらい前には読めていた話なのです。でも、今から20~30年くらい前、誰が高齢化に向けて今から手を打とうと動いていましたか。全国的にもそういう動きはあまりなかったです。

いざ、実際に目の当たりに高齢化が来て、大変だと言っています。全国の人たちがこうやって慌てふためいているのを見て、長久手市は先手を打ってやっていきたいと思います、この地域の中で皆さんが考えていくといいのかなと思います。

それから、高齢化が進行しているだけではなくて、障がいをお持ちの方も増えているのです。おそらく、昔なら障がいをお持ちの方が命をつないでいくことは難しかったのかも



しれないですけど、今は医療も福祉も進歩してきて、障がいをお持ちの方でも暮らしていけるようになってきています。身体障がい者は圧倒的に高齢者に多い、つまり年をとってから何らかの障がいを負うケースが多いのです。

もし自分が何かハンディキャップを負ったときにも、この地域だったら暮らしていける、そういう地域であってほしいと思いませんか。

さらに、年齢階層を問わず、働き盛りの世代、30代、40代、50代から高齢の方、どの世代にも精神障がいの方、メンタルを病む人が増えています。生きづらい世の中なのかもしれない。それでいいのだろうか、これも考えていきたいところであります。

価値観やライフスタイルの多様化

長久手市の外国人住民の数は、じわじわと増えており、わずかこの5年くらいの間でも、かなりの数が増えています。いろいろな国の方が、このまちで共に今、暮らしています。

そういう文化的な背景が異なるだけではなくて、一人一人の在り方もたぶん変わってきているのだらうと思います。どういうことでしょうか。

いろいろな情報通信機器があります。皆さん、どんなものをお持ちですか。多くの方は今スマホを持っていると思うのですけれども、ほぼ9割くらいの普及率だった固定電話は、今どっと落ちてきています。問題はということかということ、情報のパーソナル化が進んでいるということです。

ついでにちょっと面白い話をしましょう。

全国にコンビニエンスストアはどれくらいあるか、皆さんご存じですか。一体年間にどれくらいの方が利用しているか、ご存じでしょうか。ちょっと皆さんに聞いてみましょうか。今、たぶんこのホールにいらっしゃる方の平均として言うと、週に1度くらいかなという感じですね。でも2、3日に一度はコンビニに行っているというのが、世の中の平均値です。もっとヘビーユーザーの方もいらっしゃいます。

どんな人が、このコンビニのヘビーユーザーなのでしょう。そこで考えてみると、昼夜3交代で工場で働いているよという方も、夜中にトラックで配送をしている方もいらっしゃるということに思い至るのではないのでしょうか。

この人たちは、明け方に喉が渴いたなど、熱中症予防で何か飲もうかなとコンビニを利用されると思います。

こういったさまざまなライフスタイルの人がいて、コンビニエンスストアを支えています。

す。われわれ、今日ここにいらっしゃる方々の平均値とは、かなり異なる類いの人たちも世の中にはいるのだということです。

世の中は実に多様なのです。ライフスタイルも多様、住んでいる人の仕事も多様、国籍も文化も多様です。年齢も多様だし、体の状態もさまざまだよという話をしました。

多様性を受け容れて共に生きるということ

私たちは、この多様性と、それぞれの人の自由を認め合う懐の深さを持って、次の世代にこのまちを引き継いで、みんなで手を取り合ってやっていきましょう、こんなことが、皆さんのまちの条例、みんなで作るまち条例には、書いてあるのです。

みんなというのは誰でしょう。みんなというのは市民です。長久手市民です。長久手に住んでいる人。ですが、実は住んでいる人だけではないですね。長久手市に働きに来ている人、あるいは、長久手市内で学んでいる人、市内でお仕事をされている人、そういったさまざまな人たち、この長久手に関わっているいろいろな人たちが、長久手のまちをみんなで手を取り合って、つくっていくと考えたほうが、いいまちができそうです。こんなことも条例には書いてあります。

そして、自分と違う意見を認める、他者の多様な価値観を認めます。自分と意見が違う人とぶつかると、煩わしいし、面倒くさいと思う人もいらっしゃると思います。

でもいいのです。いろいろな人がいるのだから、最初からうまくいくと思うほうが無理があります。やっぱり揉めます。ぶつかります。いいのです。揉めて、ぶつかって、それで、その中からどうしたらこの人と折り合いがつくのかなと考えていくと、新しいものが出てくるのです。そういうことなのではないでしょうか。

2. 共に取り組むまちづくり

多様性の受容 (Diversity & Inclusion) が拓く未来

多様性を受け入れるということに関しては、国の経済産業省が、ダイバーシティ経営を進める企業を表彰しています。これは企業の話なので、まちづくりの話とは少し違うかもしれないですけども、いい話だと思ったので今日ご紹介します。

ダイバーシティ経営とは、多様な人材を生かして、その能力が最大限発揮できる機会を提供することで、イノベーションを生み出し、かつ創造につなげている経営ということです。多様な人材って何でしょうか。先ほども見ました性別、年齢だけではなくて、人種や

国籍が違うということもあります。あるいは障がいの有無、性的指向も、人それぞれです。宗教、信条、価値観など、そういった多様性もあるし、さらに、働き方とか、キャリア、経験の多様性もあるでしょう。

そういう多様な人たちの能力というのは何でしょうか。能力というのは、その潜在的な能力、あるいは特性です。



そして、それが一体どうして経営に役に立つのでしょうか。昔は物をつくればいくらでも売れたのに、最近はどうも売れなくなってきた。「どう思う？」と社長が社員に聞いても、今までみたいに、みんなが同じ発想しかできない会社だったら、「いや、困りました。社長、われわれ

もそこは悩んでいるんですよ」と同じ意見しか返ってこないです。これでは、立ち行かなくなります。

そういうときに、社長が「どう思う？」と聞いてきたら、「いや、社長、今までちょっと言わないでいたんですけれど、全然違う考えを持っているんです」とか、「私がこれまで経験した話で、実はこんなことを知っていますよ」とか、思いもよらない話を出してくる人がいたほうが、「それは気付かなかったけど、なるほどそういう見方もあるね。今までそんなことをやったことがないけれど、試してみましょう」と、今までとは違うやり方に転換していくことができるじゃないですか。多様な人がいたほうが、しなやかな方向転換できます。だから、いろいろな人を大事にしようよというのが、経済産業省の言っているダイバーシティ経営です。

たぶん、地域でも同じことが言えるのではないかと思います。長久手市の条例には、多様性と個人の自由を認め合うことが、ちゃんと踏まえられているのです。みんなで手を取り合い、誰もが笑顔で暮らせる幸せなまち長久手、を目指して行こうということです。誰もが笑顔で暮らせる幸せなまち、これがポイントだろうと思います。

先ほど言ったように、いろいろなところで揉めるかもしれないし、煩わしいかもしれませんが、でも、そこを乗り越えたときに、一緒にやっていて良かったという達成感、そして笑顔になれる、そんなことがあるといいなと思っています。

新しい公という考え方と補完性の原理

今までは、役所がやることと民間がやることは、それぞれ役割分担になっていて、別々でした。

「公私は別だ。役所のやつらは」とか、「どうせ民間は」とか、お互いに見下し合っていました。それではうまくいきません。役所も市民も、みんな手を取り合って、一緒に公共空間をつくっていきましょう。こういう時代が変わってきたよという話しです。

そして、その考え方の一つとして、補完性の原理というのがあります。できるだけ小さな単位でできることは小さな単位で、個人でできることは個人でやろうということです。

家族でもできないことは、どうしましょう。私はちょっと体調が悪くてと言うと、「いいです、いいです、休んでいてください。私たちが一緒にやりますよ」と、隣近所が助けます。そこでも助けられないことは地区、地域です。小学校区くらいの範囲でしょうか、子どもたちの見回りだったり、お年寄りの見守りだったり、防災などもそうかもしれないですが、地域で取り組んでいきます。隣近所よりももう少し広い範囲のほうがいいかもしれません。

それでもできないことは役所がやればいいですし、市ができないこと、例えば福祉の仕事はやるけれど、保健所の業務はちょっと市では荷が重いなということは、県がやってくださいよと。県でもできないことは、国がやるでしょう。東日本大震災級の災害が来て、国でもどうにもならなくなってきたら、そのときは国際社会に助けを求めたいと思います。

そうやって、小さなところでできることは、できるだけ小さなところでやるわけです。だから自己責任、自分の範囲でできることは自分でやろうよ、だけど、自分でできないことは助けを求めようという考え方で、地域のことも考えていったらどうでしょうかというのが、補完性の原理です。

3. みんなで幸せの花を咲かそう！

みんなの対話で まちの課題について 考えよう

そういうことで、みんなでこの長久手市に幸せの花を咲かせていていただきたいと思うわけです。まずは皆さん、それぞれ先ほど言った煩わしいことを乗り越えて行って、しっかり対話をしていただく。このまちはどんな課題があるのだろうか。どうすればこの課題を乗り越えられるのだろうかと考えていきましょう。

どうすればいいのかというのは、いろいろな方法があると思います。もう諦めようとい

うのも一つの方法かもしれません。いやそうじゃない、お互いがつながり合うために、お互いが知り合うために、何かいろいろなことをやっていこう、そんなイベントごともあるかもしれません。

考えたらば、実行しないと駄目です。「誰も協力してくれないからできない」とよく言います。

100%協力してもらえないとやれないのだったら、いつまで経ってもできないです。やれる人、やりたい人からまずは始めて、実際に形を示していくと、「あ、何だ、あの人、口で言っても全然意味が分からなかったけど、形を見てみたら分かった。それだったら俺も協力するわ」という人が現れます。まずはやってみることです。

それで本当にうまくいったの？ 結果をちゃんと評価して、本当にうまくいったらそれを続けられればいいし、うまくいってなかったら、またやり方を考えればいい。次の問題が見つかります。PDCA サイクルといますけれど、皆さんのまちの問題についても、これでやっていってもらいたいのではないかと思います。

他のまちの事例から考える ①地域活動団体の取組み ～刈谷市小垣江地区～

まず一つ目は、地域活動団体、地域の団体の取組で、刈谷市です。同じ愛知県ですけども、ここからちょっと南のほうです。三河のほうの刈谷市小垣江という地区があります。

小垣江地区の人たちは、地区の課題って何だろうね。災害が起きたときの備えが、うちの地区は十分ではないのではないかな。一応自主防災会はあるのだけれど、小学校区で100人くらいいるだけでは、何ともならない、よし、ちょっと本気で取り組んでいこうということになりました。

「地区に眠っている人材がいるんじゃないかな」と、口コミで「あその人は元消防署に勤めていたらしいよ」「じゃあ、そういう知識があるね」「ちょっと手伝ってくれよ」「あちらの奥さん、昔看護師さんだったんだって」「じゃあ、災害のときにけが人とかが出たら、あの方が手当てしてくれるんじゃない？」「ちょっと奥さんひとつ頼むわ」こうやって、口コミでいろいろと情報を聞き出し、いろいろな人たちを巻き込んでいって、地域の防災の組織を大きくしました。

ここでは、徹底した防災訓練をしています。例えば病気やけがの人が出て、担架で運びます。防災訓練だったら、担架がどこからともなく現れるかもしれないですけど、実際の災害のときに担架なんてありますか。ではどうしましょうか。その辺の物干し竿を持つ

て来て、そこに自分たちの着ている服の両腕を通すのです。そうすると即席の担架ができます。本気の防災訓練です。

他のまちの事例から考える ②市民活動団体の取組み ～四日市とんてき協会～

私は、四日市とんてき協会という団体の代表理事で、四日市でまちおこしをしているという別の顔があります。

未だに教科書には、四日市は全国の4大公害の地として載っています。四日市という地名は、恐らく小学校中学校の社会科の教科書のどの单元にも載ってなくて、公害のところにしか載っていません。だから、全国の人には、四日市は、イコール公害で刷り込まれています。イメージが悪いのをどうにかしようということで、最近はやりのご当地グルメ「とんてき」に目を向けて、いろいろな取組をしています。

これも、最初に始めたときには、総スカンでした。あんなものを四日市の自慢みたいに言っているけれど、そんな大したことのない食べ物じゃないか。四日市の代表とか言われたらかなわんぞとか、散々周りの人に言われて足を引っ張る人がいました。

本当に揉めるのではないですけど、煩わしくて止めようかと何度も思いましたが、やっているうちに、テレビのメディア、CBCの取材を受けたりなんかして、だんだん知名度が上がってくると、もうケチをつける人はいません。

他のまちの事例から考える ③まちづくり組織の取組み ～知多市南粕谷コミュニティ～

愛知県知多市の南粕谷のコミュニティの話です。

南粕谷という地区は、知多市のとなり東海市にある新日鉄の社員さん向けの住宅地として発達してきたところなんです。発達してきたと言うと響きがいいのですけれども、ある一定の年にその住宅地を一斉に売り出して、多くの人が住むようになり、それからもう何年もたっています。

新興住宅地は、夫婦と子どもで住み始めるでしょう。その子どもが20歳くらいになって、進学や就職して出て行く子どもがいます。あるいは、結婚して別に家を構えます。

新興住宅地で育った子どもは、残念ながら、その親と同じ家で、あるいは、結婚した後もその近所に住み続けて、自分たちがそのまちを継いでいくことは少ないと感じます。南粕谷もそうで、高齢化してきています。

どうやって自分たちの元気を維持しようかと考え、みんなで寄って、集まって、体操し

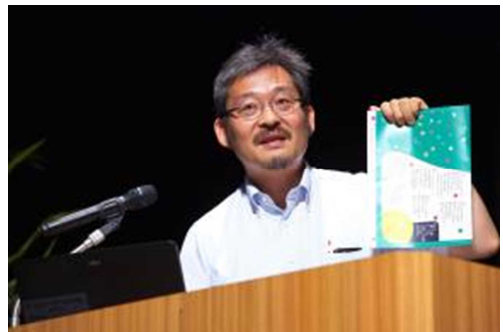
たり何かしたりすることで、認知症防止をしよう、健康維持をしようという元気会という活動を始めました。

ところが、さらに高齢化してくると、どういうことになるでしょうか。元気でいられなくなってしまう。そうなってきたらどうしたかという、今度は、おたすけ会です。家の電球を取り換えるのに、近所に頼れる人がいないです。そこでボランティア組織をつくって、地元の人がお互い支え合うような仕組みをつくりました。

さらに、地域の人々の居場所として、南粕谷ハウスというのをつくって、ここに行けば誰かしらみんながいて、1人にならないで済みます。話し相手があります。

「みんなでつくるまち条例」を活かして

みんなでつくるまち条例ができて、これを生かしていかなかったらしょうがないのです。この条例を生かして、どうやって誰もが笑顔で暮らせる幸せなまちを実現していくことができるのか。ここが今、問われていると思うのです。



ぜひ、このシンポジウムも一つのきっかけにしていただいて、お互いに、相手と自分とは違うのだということを尊重し合いながら、一人一人が我がこととして考えてください。一生懸命皆さんで対話をして、この手を取り合っ、やれること、やりたいことからやっていっていただければいいと思います。そうすれば、恐らく必ずや笑顔のあふれる幸せなまちになっていくのではないのでしょうか。

この条例を機会に、皆さまのまちづくりがさらに深まっていくことを期待して、私の、前座としての講演はおしまいとさせていただきます。

皆さんご清聴どうもありがとうございました。

●パネルディスカッション

パネリスト 葛谷 誠 氏（西小学校区まちづくり協議会）
中村 利男 氏（元・自治 KEN、南小学校区自治会連合会会長）
川嶋 知子 氏（ながくて幸せ実感広め隊）
西畠 綾花 氏（DoNabenet in あいち）
小林 慶太郎 氏（四日市大学副学長）

コーディネーター 大庭 卓也（元・自治 KEN）

○大庭：ただ今、司会者からご紹介いただきました、大庭と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

今回のシンポジウムは、市民の手づくりということで、コンサルの台本があるわけでもなく、市民がこのコーディネーターを務めるのは非常に異例なことでありますが、この条例ができた実態を表すという意味で、こういう手づくりのシンポジウムを開催するわけです。



私もこういう場に慣れているわけではございませんので、パネリストの皆さんのご協力をいただきながら、会場の皆さんに伝わる言葉と内容で活発な議論になる予感もありますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

パネリストの皆さまには、時間が限られておりますので、発言はコンパクトにお願いいたします。小林先生には、適宜その都度アドバイス、コメント等をいただければと思っております。

最初に、パネリストの皆さんの自己紹介を兼ねまして、現在、関わっていらっしゃるまちづくりの活動内容につきまして、簡単にご紹介をさせていただきますでしょうか。

○葛谷：よろしくお願ひします。私は西小学校区まちづくり協議会をしております葛谷と申します。

私たちの小学校区まちづくり協議会は、今年で2年目になりました。合言葉は、「ふれ

あい つながり みんなで楽しむまちづくり」です。

市民の皆さんで話し合いをしているのですけれども、そのテーマとして、自治会のこと、子どもの育成、生きがい、安全、防災、それから、私たちが拠点としています西小学校区地域共生ステーションのことについて、話し合っています。

私はまちの相談員ということで、それぞれの団体のご相談だとか、そういったものをつないだり、あとは市民の皆さんのご相談に乗って、私が解決するわけではなくて、社会福祉協議会さんだとか、市とかいろいろなところにつないで、皆さんで解決しようということで取り組んでおります。よろしくお願いします。

○中村：私は、自治 KEN の所長と、南小校区自治会連合会の会長をしていますので、連合会で地域のためにどのような取り組みをしているかを紹介しながら、地域の報告をさせていただきたいと思います。

南小では、六つのことに取り組んでいます。一つは、犯罪も多いということで、防犯カメラの設置事業をしています。それから、先ほどもあったように、スクールガードの見守りも行っております。防犯パトロールも行っております。一斉防災訓練も継続して行っています。皆さんの楽しみの校区運動会、子ども中心の夏祭りも行っています。

この取り組みにはテーマがありまして、南小は「つなごう きずな きずこう コミュニティ」を合言葉に、住みやすい、安心安全なまちづくりを目指して、今活動しているところであります。

○川畷：幸せ実感広め隊の川畷です。よろしくお願いします。

市内で活動されている団体の方や、個人の方取材してまとめ、市のホームページに載せて、他の市民の方へ情報を提供しております。

前向きな活動をされている市民のことを知って伝えることにより、周りの人々が感化され、みんなが幸せになるまちづくりに生かしたいと考えております。

みんなが幸せになるまちにするための指標もつくりました。本日配布されております、このピンクのパンフレットにも掲げているのですが、それは子どもの笑顔を育てるまちです。

その指標をかなえるための市民の生活目標も考えてみました。例えば日頃から笑顔で生活ができていると感じているとか、日頃から近所の人にあいさつをする、される習慣があ

るといったもので、決して難しいことではないと思います。一つでもその小さな目標に向かって生活していれば、身近な子どもの笑顔をつくることができると思います。

将来を担う子どもが居心地の良いまちであれば、みんなが幸せと感ずるのではないでしょうか。そんなまちになるように、微力ながらお手伝いさせていただいております。

○西島：「DoNabenet in あいち」から来ました、西島綾花といいます。今日はよろしくお願ひいたします。

私は、食事を通して、地域の方と顔の見える環境をつくることを目的に活動しています。具体的には、西小学校区地域共生ステーションで、3カ月に1度お食事会を開かせていただひて、お食事会のテーマとかメニューとか、当日のタイムスケジュールなどを企画し、当日の運営も、広報活動も、自分たちで地域の方のお力も借りながら行っています。

今月の7日、七夕の日にもお食事会をさせていただきまして、夏バテ予防のメニューということで、七夕のちらしずしとか、豚しゃぶ、きゅうり巻きなど、いろいろなメニューをつくりました。それ以外にも、小学校の夏祭りとか、運動会、子ども食堂などにボランティアとして参加したり、シルバー人材センターさんと、さつま芋の植え付けとか、芋掘りのお手伝ひもさせていただきました。食事ではなくて、お酒を通してつながりをつくるという、お酒ネットという活動もさせていただいたり、防災訓練にも参加させていただひています。

今は、愛知県立大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学の学生が所属しておりまして、総勢40名で、外国語学部や社会福祉学科など、いろいろな学部の学生が参加してひて、いつもにぎやかに活動しています。よろしくお願ひします。

○大庭：ありがとうございました。今、皆さんが現在関わっていらっしやるまちづくりについて、それぞれご紹介をいただきました。ひよっとしたら会場の皆さんも、すごくたくさんやっっているじゃないかとびっくりされたかと思ひますけれど、私が一番びっくりしてひます。

それぞれの活動は、多岐にわたっていると思ひますけれども、その活動の中で悩み、解決しなければならぬ課題、もっとこうしたいなということがあると思ひます。その辺を教へていただきたいと思ひますが、葛谷さん、どんなものでしょうか。

○葛谷：私は西小学校区の代表として来たつもりで、今日ここにいるのですけれども、皆さんの地区でも、同じような悩みがあると思います。既存の会、自治会も含めて、防災会だとか、シニアクラブさんだとか、いろいろあると思うのですけれど、そういったところの代表者さんになられる方がいないとか、その会自体の存続ができないという声が多数寄せられています。



西小学校区でも、そういった問題を解決するためにいろいろお話し合いはしているのですけれども、ここが皆さんのまず解決しないといけないところなのかなと思っています。

私個人としては、古くていいところは残しつつ、新しいコミュニティに転換している転換期になっているのではないかと思うので、皆さんが知恵を出し合って、新しいコミュニティは何かというところで、まちづくり協議会が動いているという認識です。

○大庭：この件に関しての議論は、また後に続けるとします。問題点、課題点について、川島さんはいかがでしょうか。

○川島：広め隊の活動自体は、月に1回のゆっくりしたペースで集まって、お茶菓子を前に情報交換や取材先を決めたり、取材をしたりと、楽しい時間にはなっているのですけれども、メンバーたちの人脈の限度がありまして、取材先の発掘に限界を感じております。

取材者をもっとスムーズに広げていくことができ、自然につなげていけると良いのですが、私自身も人付き合いが得意なわけではないので、次の取材先を決めるのにとっても悩むことがあります。やっぱり市民同士のネットワークの大切さを感じております。

○大庭：ありがとうございました。

元に戻りますけれども、葛谷さんは、代表者になる人がいない、自治会とかいろいろなまちづくりをしていく集まりの中で、やっていく人を見つけることすら難しいということですが、そういう人たちが出てきても、代表者になる人はもっと見つけるのが難しいというようなことがあると思いますけれども、中村さんは自治会、連合会をおやりになっていて、どのような感想をお持ちでしょうか。

○中村：参考にはならないかもしれませんが、私たちは、地域でどのようなかたちで助け合って、顔見知りのある関係づくりをしようかということで、いろいろ話をして決めてきたことがあります。

それは、防災訓練を始めるにあたり、地域みんながなるべく参加して、地域がまとまるものは何かということをお話したのです。自治会は加入者が2000世帯くらいありますが、安否確認のための黄色いタオルを、1軒1軒配っていただいて、それを地域のつながりにしていこうということを始めました。その事業を今、継続してやっております。

そのことが、地域の話し合い、顔の見える関係、共助、お互いに助け合うということを生み出すのではないかと考えています。

防災訓練をやることによって、地域がお互いに助け合う土壌づくりができるのではないかと話した結果、そのようなかたちで現在取り組んでいるところです。

○大庭：分かりました。小林先生、代表者というのは矢面に立つ人ですから、組織ができたとしてもその矢面に立つ人、利害を調節する人はとても大変ですし、損な役回りといえますか、下手したら恨まれるのではないかというようなことにもなりかねません。

先生自身も、先頭に立ってやっていらっしゃる立場からして、組織の頭をどうやってつくったらいいのでしょうか。

○小林：絶対的にこれが正しいという答えは難しいと思います。今、大庭さんから、「おまえも、頭で大変だろう」とおっしゃっていただいたのですが、当初は大変だったのですが、今は僕はすごく楽をさせてもらっています。

最初に組織を始めたときは、私が声を掛けてみんなでやっといこうよと言っていたのですが、私もだんだん忙しくなってきた、プツンときて、「もう辞めてやる。こんな組織は要らん。やりたければ、おまえらが勝手にやってくれ。俺はひくわ」と言ったのです。

そうしたら、「今ここでこの組織を解散したら、今までやってきたのがもったいないじゃん」とみんなが言い始めて、「存続したいわけ？ みんな」と言ったら、「いや、したいよ」と。「でも、俺はもう無理だよ」と。

それで、「じゃあ、分かった。対外的なあれもあるから、名前だけ代表でいてくれ。やることは俺たちが全部サポートするから、みこしに乗ってくれ」と周りの人が言ってくれました。それからすごく楽になりました。

だから、1人の人に押し付けて、その人に全部やってもらうというかたちで、代表なり組織のトップがいるとだんだん疲れてきてしまうと思うのですけれど、そうやって「じゃあいいよ。もう辞める」と言って、組織も「こんなの解散してしまえば」と言ったときに、「いやいや、この組織が今無くなったら困るよね」と言う人が必ず出てきます。実質のトップは誰かというのは置いておいて、実際に動いてくれる人、必要性を感じて「そこまで言われるのだったら俺が一肌脱がないといかん」と言う人が出てくると思うので、本当にその組織が必要かどうかということから、まず1回考えてみるのもありかもしれないと思います。

要らないのだったら、1回辞めちゃって、別の組織をつくったらいいじゃないですか。

○大庭：なるほど。西畠さんにお伺いしたいのですけれども、先ほど川篤さんが、ネットワークがあっても、取材先がだんだん手詰まりになってくるということでした。人と付き合うことがあまり得意ではない方も、たくさんいらっしゃると思うのです。

そういう方も、まちづくりに参加していただきたい。そういう中で、学生さんたちをたくさん束ねておられる西畠さんとしては、ネットワークづくり、仲間をどのようにしてオーガナイズしていくのか、あるいは引っ張り込んでくるのか、まとめ上げていくのですか。どういうスタンスでおやりになっていらっしゃるのですか。

○西畠：学生という限定での仲間づくりだったら、今年は私たちの団体に、1年生が20名入ってくれました。2、3年生も今の時期に、今更なのですけれどということが入ってくれました。

どうして入ったのと聞いたら、「楽しそうに活動していたから」とか、「活動が楽しそうだなと思ったから」ということで入ってもらえました。自分たちが楽しんでいるということの情報も、発信していくことだと私は思っています。

ただ、地域の方も含めた仲間になると、食事会の参加者の方は限られてきます。外に出られない方は、参加していただけないということを私たちもずっと悩んでいて、もっと力があって地域に顔が広い方に頼っています。例えば社協の方とか、市役所の方にお力を貸していただいて、地域の方の活動場所に私たちが入っていきます。例えばサロン活動だったり、夏祭り、運動会に行って、まずは私たちの顔を覚えていただきます。

力を借りながら、自分たちで、できるだけつながりをつくっていくというふうに工夫し

てきたつもりです。

○大庭：なるほど。葛谷さん、この条例でも、まちづくりの単位として、まちづくり協議会というものが言われていて、六つの小学校区の中で、できたところや、今つくっている最中のところや、全く未着手のところなど、いろいろあります。

まちづくり協議会の守備範囲はものすごく広くて、得意である人や得意でない人、あるいは、関心のある人や関心のない人、この分野だけは関心はあるけれど後は関わりたくない人、いろいろな方がいると思います。

そういう中で、まちづくり協議会に関心を持っていただく、あるいは、まちづくり協議会を通してのまちづくり、まちづくりを通してのまちづくり協議会をどうやって人に発信していくのか。あるいは、仲間にしていくのか。その辺の苦労は、どんなものでしょうか。

○葛谷：特に広報においては、今だと、広報誌とか、地域の掲示板に貼らせてもらったりしています。

私がおもうのは、必ずその会議に出席しないとイケないとか、どこかに所属していないと駄目ではなくて、お一人お一人が、住んでいるところで少しまちのことを考えて、こうだなと思ったことで行動してもらったらいと思います。それを、まちづくり協議会に参加している方とか、組織を代表している方たちが温かい目を見て、それも含めてまちづくりだよというふう意識を変える。そこからまちづくりが始まるのではないかと思います。

必ずどこかに所属するという縛りを無くして、そこがどうやりとりしていくかという仕組み、その構築をこれから考えていかなければいけないのではないかと思います。

○大庭：なるほど。中村さんに伺いたいのですが、中村さんは、長いこと時間をかけてまちづくりをされてきているわけですがけれども、先ほどおっしゃった黄色いタオルのことに賛成している人たち、今のマンション族、歴史の浅い新しく引っ越してきた人たちなど、住民の中には温度差もあれば、住民になった時間の長さ、深さ、地縁、血縁の濃さもばらばらな中で、やっていることをどうやって理解していただけたらいいのでしょうか。

僕は、黄色いタオル運動を前にもお聞きして、とてもいいことで、ぜひ広めればいけないか、誰が聞いてもいいことだと思うだろうと思っていたくらいですが、そういうことに対して、「俺はそんなことをやりたくはないんだ」とか、理不尽な抵抗みたいなものに遭

うことはあります。

○中村：それは、先生も言われたようにあると思います。

私たちも、やれるところからということでスタートしましたので、自治会の役員さん、自治会長さんと話し合いを持ちながら、やって来たところですよ。嫌々やるということではなくて、やれる人から、やれるところからということです。

今の黄色いタオルを始めたのは、安否確認をして、地域のつながりがよりできるということと、組長さん以下全ての人たちが、地域の方に黄色いタオルを配って、「これは防災訓練のときに必ず門扉に掛けてください。それで安全確認をします」といちいち言うことができるからです。

そのために会議もたくさんやりましたが、今言われたような「私がこんなことをやらなくていいではないか」という意見も出たりしました。でも、やってみようということで、今年で3年目になりますが、だんだん安否確認の黄色いタオルを掛ける率も増えてきましたし、それを通じて防災訓練に参加する方も増えてきました。そういう中で、地域はつながっていくのかなと思います。

うちのキャッチフレーズを何遍も言いますが、「つなごう きずな」です。コミュニティも大事にしていますので、「きずごう コミュニティ」を合言葉に、少しずつ楽しい南小校区のまちづくりのために、役員一同やっていければいいのかなと、今は考えております。

○大庭：ありがとうございました。ずっと長いことやってこられて、理解が深まりつつあるのかな、輪が広がりつつあるのかな、まちづくりに対して理解が広がりつつあるのかなという実感はお持ちでしょうか。

○中村：持っていると思います。地域で、少しずつでも、地域に何らかのかたちで自治会連合会、自治会の皆さんが参加しているという位置付けをするためのタオルだったというのもあります。防犯のほうでは、防犯カメラを設置したときに、アンケートも取りましたし、それに基づいて防犯カメラを設置した後に、地域で防犯カメラ作動中というステッカーも全戸に配布しました。それも、地域の皆さん1軒1軒に配ってあるものですから、



それでよりつながりがあるのかなと実感として感じています。

○大庭：分かりました。ありがとうございます。

皆さんそれぞれのご苦勞を抱えて、まちづくりにそれぞれのスタンスで取り組まれているわけですが、先ほどから話が何回か出ておりますけれど、ここで小林先生に再度お聞かせいただきたいなと思います。

先生の先ほどの話の中でも、やれる人、やりたい人からやれることをというようなスローガンがレジュメの中にあっただと思います。まちづくりに携わる人たち、あるいは自分がやろうとしたこと、あるいは既存としてある組織の仲間を増やそう、シンパシーを感じる人を増やしていこうとしても、嫌がる人だっているわけです。「俺はそんなことはやりたくないよ」「あんたらがやってよ」「俺は、邪魔はしないけれど、応援もしないぞ」というスタンスの人もいると思うのですが、そういう人たちを、首に縄を付けて引っ張って連れて来るわけにはいかないと思います。

着実にまちづくりをしていくために、どうやって仲間づくりをしていったらいいのか、重なる部分があってもいいのですけれども、教えていただけませんか。

○小林：一定数の人が協力してくれないというのは、やむを得ないところもあると思います。それこそ生活スタイルもいろいろあって、みんなが昼間になにかやろうというときに、昼間寝ていなかったら仕事に差し障る人も中にはいらっしゃるでしょう。

全員に首縄を付けて連れて来るというのは、どだい無理だと思うのです。ただ、その中で、いつも同じ人しか来ない、限られているというのは、皆さん共通の悩みだと思うのですが、なかなか輪が広げられないです。

ではどうすればいいのだろうかということなのですが、ある程度活動が活発になると、「あの人たちがやっているようね」というのが周りの人に知れてくると、かえって入りにくいというのは意外とあると思うのです。20、30人で仲良くやっているところに、自分がひょっこり一人で行ってというのは、気後れする。それはさすがに怖いなど、皆さんも思いませんか。そういうのがあると思うのです。

ゼロか1かみたいなかたちで、いきなり入ってこいというのは、なかなかハードルが高いので、そういうのは諦めて、周辺的な活動です。例えば拡大バージョンで、「いつもと違うかたちでこういうことをやるので、普段来ていない人もウエルカムなのだけれど、一緒

にやってみない？」とかです。

あるいは、まちづくり協議会はいろいろな活動をしていますから、「このことについてだけ参加してくれればいいんだけど、取りあえず防災訓練だけは来てもらえない？」とか。「それだけでいいのだったら行くわ」と言う方はいらっしゃると思うので、できるだけハードルを下げて、どこかの部分でも絡んでもらえたら、しめたものです。1回絡んでもらったら、その人に、「また今度こんなことやるから来てよ」と、連絡が取りやすくなりますよね。



お互い顔を知っている人が1人でも2人でも中に出てくると、「あの人がいるのだったら行ってみようかな」と、行きやすくなるじゃないですか。そういうきっかけをつくることは大事なと思います。

あともう1点だけいいですか。これも先ほども申し上げたことで、かぶってしまうのですが、刈谷市の小垣江の話をしました。得意な人に得意なことをさせる仕掛けは有効だと思います。拒みにくいじゃないですか。「奥さん、元看護師だったのでしょ。災害のときだけでいいから、けがしている人の面倒くらい見てよ」と言われたら、「私が看護師だということまでバレているのに、拒むのはなかなか難しいわ」となりますよね。そういう人は、「そのときだけよ」と言ってたぶん協力してくれます。

この人はこれが得意だ、これがツボだというところをブズブズと刺していくと、逃げられなくなって、「分かりました。それだけはやります」と入ってきてくれて、だんだん絡みが濃くなっていけば、仲間になっていくのかなと思います。

いきなり全部参加ではなくて、部分部分からちょっとずつ入ってきやすいように、なだらかな参加の仕方を用意しておく。裾野を広げておくといいのじゃないかなと思います。

○大庭：今、先生のお話で非常に示唆的だったのは、周辺的な活動、あるいは、「それだけでいいから来てほしい」と誘い込む、活動のハードルを下げることです。

得意な分野を攻撃すると言いますか、そこだけでいいからと。災害なんて毎日あるわけではないのですから、そのときに何かやってくださいというお願いをします。それで、何もやっていないのだけれど、その人に、まちづくりに関わっているというマインドが形成されたら、非常にいいことだと思います。

西島さんにお伺いしたいのですが、先生が一連の今おっしゃった中で、仲良しのバリアーというか、一つの塊だけがグループをつくってしまって、周りで見ている人が入りづらいということでした。大学生は大人とは違うと思いますが、遠くで見ている、あの仲間はいいけれど、ちょっと入りづらいなということは、日々の活動の中で感じることはありませんか。

○西島：あります。私たちはもともと、社会福祉学科の学生の参加がほとんどです。ほかの学科の学生が、DoNabenetさんは社福のサークルだから、ほかの学部は駄目なのではないかという風潮が広がっています。

社会福祉の子ばかりが集まってくるサークルだったり、参加者の方にも一度、私たちはメールをさせていただいていますが、「DoNabenetさんはコミュニティができてるので一人では行きづらい状況です」というメールも実際にいただいていますので、それは本当に痛感しています。



○大庭：それを打ち破るための工夫とか、幹部の方々、役員の方々と話されていることはありますか。

○西島：学生に対しては、今年は学部に関係なく入ってもらえたのですが、勧誘の段階で、最初に私たちは地域福祉というのを主張していたのですが、それだと福祉学科だけになってしまうから、いろいろな学科が入っていいし、地域の人と楽しくご飯を食べて、おしゃべりしているサークルだよと言っています。みんなは、それだったらということで、外国語学部の子とかも入っています。

私たちは西小校区共生ステーションで活動させていただいているのですが、今は地域の方のことを話し合っている段階です。4年生の先輩方からもお話をいただいています。行き慣れていない方にとっては、自分の場所やテリトリーではないので、来づらいのです。なので、私たちからその方たちのテリトリーに少しずつ入って行くのはどうだという話をして、例えば長久手市内のカフェをできればお借りして活動したり、ちょっと難しいとは

思うのですが、皆さんも髪は絶対切られると思うので、美容室とか理容室に行って活動してみるのはどうだろうという話をしています。

○大庭：なるほど。お偉いと思いました。そうやって学生さんの中でも、自己の改革をしているというのは、見習わなければならない立派な活動だと思いました。

川寫さん、先生、あるいは横で西島さんがおっしゃったことから、最初におっしゃったご自分の活動の中でのやりづらい点、悩み、ネットワークの広がりのおっしゃいましたけれど、それならこんなことが当たるのかな、あるいはさらなる問題が見つかったでもいいのですが、何か気付きの点はございますか。

○川寫：まず、年齢的に、新しい居場所に向かって新しい仲間をつくるような雰囲気の間ではないので、ちょっと大変かなと思いました。

本当にゆったりとした雰囲気の活動なので、あまり活発にしても、自分たちが大変で、ボランティアというイメージなので、今の状態でもいいのかと思いつながっていかねばならないのですけれども、本当にどうしようというところでさまよっている状態です。環境が違うので、なかなか結果が出ない感じです。

○大庭：なるほど。中村さん、今、川寫さんおっしゃいましたけれど、ボランティアというお金にならないようなところに、世のため人のために自ら身を投じる、時間を投じる活動では、まちづくりをやらなければならないという義務感と、まちづくりは楽しいよねと思うところは、非常に大事な分岐点だと思うのです。

中村さんは、長いまちづくりの中で、どんな感じでおやりになってきたのでしょうか。

○中村：言おうとしたことなのですけど、やっていて楽しいという活動をしないと、継続できないと思っています。

私も退職して、初めはうろろしていたのですが、自治会に関わって、長久手のまち、南小のまちで何か活動しようかなと思ってやったのですが、大庭さんが言われたように、嫌々やっていたら活動は前進しないし、自分たちの意見も反映しないだろうということで、自治会のメンバーも結構お年寄りなのですが、1週間に1回くらい会って、南小のまちについていろいろ話しています。

先ほど先生が言われていたように、いろいろな角度から話が出てくるものですから、そういう中で黄色タオルも出ましたし、見守りのための防犯パトロールのためのカメラの設置の話も、いろいろ出たということです。

だけど一番言えることは、嫌々活動するのではなくて、活動していることが楽しい。楽しいということは継続できるということで、私がやっている以上は、楽しくみんなと話し合いながら、嫌な関係もありますが、そういうことは無くして、自分の意見も言い、相手の意見も尊重し、お互いに話を聞き合う土壌を、南小ではつくって、より地域のために頑張っていきたいということです。

そういう気持ちがあれば続くのかなというのが、今の私の到達点だと思います。

○大庭：世代間の交代で、例えば中村さんもいずれリタイアされていきます。自治会もリタイアされていくので、それより若い人たちが役員を務めるようになります。まちづくり協議会も、若い人たちから高齢者までうまくピラミッドの形をしていけば、そういうかたちで世代が繰り上がってうまく循環していきます。

例えばこの条例のタウンミーティングでも、何でもそうなのですが、もちろん昼間は勤めに行っている若い人は来られません、土日にやっても来ません。集まるのはいつもお年寄りばかりということで、世代交代が進まないという悩みはどうなのでしょう。

○中村：1番の悩みの一つです。そういう居場所があって、より若い人たちが土日集まってくればいいのですが、南小はまだ地域共生ステーションがないものですから、その話し合いもして、進めているところです。今は僕の下に一応集まりますが、居場所がないというのが活動の弊害になると思っています。

後で話そうかと思ったのですが、地域をつくるために5年前からいろいろみんなで話し合っ、ようよう南の地域共生ステーションもできるようになりました。できるようになれば、そこにみんなが集まります。子どもたちも集まるし、共働きのお父さんお母さんも集まるだろうし、高齢者も集まります。そこでいろいろなことができるのではないかと思います。お茶を飲んだり、本の読み聞かせも、将棋を教えたりもできます。

その設計も済みました。そのようなかたちで、地域に根差した地域共生ステーションが、この5年話し合ってきた中で根付こうとしています。

居場所ですので、誰でも気楽に来られる場所として、いつでも開いています。鍵もかかっ

ていないところが地域共生ステーションだと思っています。

西小学校区には地域共生ステーションが既にできていますが、そこにはいろいろな人が参加してくれていますので、南小学校区でも地域共生ステーションをつくり、まちづくりも考えながら、継続して皆さんにやっていただくような土壌をつくっていきたいと思います。

今のところそういう場所がないので、高齢者だけでやっているという実情です。地域共生ステーションができれば、道が開けるかなと希望を持っています。

○大庭：今の中村さんの希望ですが、地域共生ステーションの先輩の葛谷さんから見て、果たして中村さんの理想、希望はかなうものなのでしょうか。どうですか。

○葛谷：私は、地域共生ステーションに週3、4日駐在して、まちの相談員ということで、皆さんと触れ合いさせていただいています。特に、午前中はお年寄りの健康体操とか、小さいお子さんをお持ちの方が遊びに来られますので、そこで会話が生まれています。お母さんたちも、市役所に直接言うことがなかなかできないので、「実は保育園で困っているんです」とか、「子育てが大変なんです」という普通の会話から、問題解決に導かれることが多々あるので、やはりそういった場は必要かなと思いました。

私は常々、お一人お一人に真剣に向き合うことが大事だと思います。ある方に、私に依頼すると「断らないから嫌いだ」と言われたのですが、私としては、言われたことは全部かなえたいと思って活動しています。腰を引いてまちづくりに臨んでいるわけではなく、真剣に皆さんと対話したいと思っているので、先ほどの大学生の方ではないですけど、私のほうから出掛けていくことも、最近は多くなってきました。

そういったところで、一人一人とやっていけば、自然といいまちになるのではないかというのが、私個人の感想です。

○大庭：なるほど。ディスカッションの時間も半分を過ぎてしまったのですが、ここまでは、パネリストの皆さんが今やっという活動と、その周辺のことについて話し合ってきたわけです。重複するところも多々あると思いますが、今後、長久手市のまちづくりは、どうしていったらいいのでしょうか。どうしていきべきなのでしょう。

少し抽象的な課題かもしれませんが、これについて考えていきたいと思います。ひ

と言でまちづくりと言っても、非常に広い捉え方があると思います。先ほど小林先生から、これからのまちづくりにおいては、市民も重要な担い手であるということや、市民が自分たちでできることは自分たちでやっていこうという考え方を示していただいたと思います。

そこで、まず小林先生に伺いたいのですが、講演内容と重複するところが多々あるかと思いますが、自分たちでやっていくということは、言うはやすし行うは難しです。今の考えを、先生が一生懸命取り上げてくださいましたけれど、まち詩も、ある種理想論です。皆さんが活動の中での問題点を多々挙げてくださいました。先生自身も活動をなさっていらっしゃるんですが、長久手市の条例ができ、これから市民たちがやるべきこと、なすべきこと、何から始めたらいいのかが、一番分からないところです。

「条例ができたから何かやらないといかんのか」とか、「やれば何かもらえるのか」とか、そういうことになると思うのです。そういうところを、先生からお話しただけだと思います。

○小林：これは、なかなか難しい質問です。まず、何をしなければいけないのか。これは、そもそも、義務的に「これをしなくてははいけません」「皆さんこれをしなさい」という条例ではないと思います。

正直に言えば、条例ができたからといっても、何もする気がなければ、しなくて、しばらくぼうっとしていてもいい自由も、もちろんあると思います。でも、今はこの地域は暮らしやすいと思って暮らしていらっしゃるのだと思いますが、20年先30年先、自分の子どもや孫がこのまちでずっと暮らしていけるでしょうか。このまちを、暮らしやすいまちとして引き継いでいけるだろうかと考えたときには、課題もないわけではないですよ。そこに思いを巡らしていただく、想像力を働かせていただくのが大事かなと思います。

たとえば、先日の岡山とか広島の水害を見て、香流川があふれるようなこともあり得るのかなとか、桁を越したような雨がどわっと降ったらゼロではないかもしれないとか、考えてみるといろいろありますよね。

あるいは、先ほど小林というやつがしゃべっていたけれど、そうか、新興住宅地はみんな若い子はいずれ独立して出て行ってしまうと、このまちも今は若くて元気だけれど、いずれじじばばタウンになってしまうのかなという心配も、地域によってはあるかもしれません。

だとすると、そのまま指をくわえていいのですか。そういうときに、自分でできる

ことは何かなど。私1人ではできないにしても、近所の仲良しの人と声を掛け合ったならば、こんなことくらいはできるのじゃないかなというところから、まずは始めてみてもいいのかなと思います。

実は、そうやってちょっと気にしてみると、先ほど言いましたように、インターネットとか、スマホとか、すごく発達しているので、少し探してみると、どこかしらで、既にそういうことをよその地区でやっている人がいたりします。あるいは、もしかすると長久手市内にも、「何だ、それをやっているのがまちづくり協議会の人たちだったんだ」ということで、活動がかぶるところがあるかもしれません。

だったら、私ができることはないかもしれないけれど、やれることはやらしてちょうだいよと言って、門をたたいてみるというのもあるかもしれません。

まずは考えて、情報を収集して、自分がやれそうなことが見つかったら、ちょっと思い切って飛び込んでみるということを、一人一人が考えていただくといいのかなと思います。

○大庭：なるほど。今の先生の言葉の中で、私として非常に重要だったのは、想像力です。先生が例に挙げておっしゃった水害でもそうですけれども、まさかというところが起きるような時代です。これは、災害ではなくても、自分たちの暮らしの中でもまさかと思うようなことが起きる時代です。かつては想像ができなかったことが起きる時代です。



あるいは、人口は読める数字ですから、そういうものを放置していて、想像力を働かせないという未必の故意みたいなこともあると思うのです。

そういうことで、市民一人一人ができることと、行政が携わること、議会が携わっていかなければならないことがあると思います。この条例の中でも、三つの三角関係、三つの大きなトライアングルがあって、市民がいて、行政がいて、議会があります。べつに市民だけがガリガリ頑張っていけばいい

市になるわけでもありません。この三つの関係がいい緊張感を持ったトライアングルを形成することが重要であると、この条例もうたっているわけです。

もう一つお聞きしたいのは、行政とか議会との見合い、住民が思っていることとのずれを防ぐために、行政や議会とどういふふうに市民たちは向き合っていけばいいのでしょうか。

○小林：そもそも行政とか議会が住民とずれてしまうということは、あってはいけない、あってほしくないことです。

今日も、もしかしたら議員さんがおみえかもしれませんけれども、市民の皆さんからすると、自分の地区から出ている議員さんとか、人脈的に関係がある議員さんとかに、私はちょっと今こんなことで悩んでいるのですとか、これこそ想像力を働かせて先々問題になるのではないのかということ、相談していただくといいのではないかと思います。

議員さんも、地元の住民の皆さんに、何か困っていることないの？とか、あなたこんな活動しているけどうまくいっているの？とか、御用聞き的なことをしていただいてもいいのかなと思います。

そして、それぞれの地区なり、いろいろな組織関係、人間関係の中から、いろいろな課題が出てきたものを、議員さんが議会に持って行っていただいて、話し合いをしていただきます。議会って本当はそういう場です。

この条例だって、考えてみれば議会で作っていただいて、最終的に議決をしていただいた、決定していただいたので機能していくこととなります。議会が決めていただかなかつたら、市としては何も動けないところがあると思うので、まず、議員さんと市民の皆さんとが、もっともっと仲良くなっていくといいのかなと思います。

次に市はどうなのだ、役所はどうなのだということなのですが、役所の職員の皆さんは本来プロのはずです。いろいろな情報もお持ちだろうと思いますし、いろいろな仕組みをつくっていかうということにも長けているはずです。

議会の人たちからいろいろな話が出てきた。議員さんからいろいろな問題提起がされた。では、それを受けてどんな仕組みをつくれればいいのか。これは、役所の方が市民とも相談しながら、こういうふうになったら皆さんが解決しやすいということ、やっていただくといいのだろうと思います。

まさにおっしゃっていただいたトライアングルで、それぞれが自分だけで抱え込まずに、「こういうときにどうすればいいのだろう」とお互いに相談し合う。役所の人からしても、「皆さんはこれだったらうまくできるかな」「こちらのやり方のほうが都合がいいの？」ということ、働き掛けていただく。

そんなかたちで、お互いが敵ではなくて、立場は違うところもあるけれども、一緒にそれぞれまちのことを考えているということで、協力し合っていただけるといいのかなと思います。

○大庭：ありがとうございました。今、小林先生がおっしゃったことについて、西島さん、それに関係したことや、直接関係したことではなくてもいいですし、自分の活動の中のことだけでなく、まちづくり全般のことで結構なので、自分のこと、やっていらっしゃる活動以外のことでも、今自分が感じるものがあつたら、何かひと言いただけますか。

○西島：市とか議員さんということで、直接私に関わる機会はあまりないのですが、例えばお酒ネットという活動を、最初に紹介させていただきました。そこには、市役所の方が「来ちゃった」と言っていて、「ちょっとこれ、こうしたいけど、なかなかこういう場がないのです」と漏らしたり、市役所の方とプレゼンやまちづくり甲子園などにも出させていって、自分の意見を表明させていただいています。

そういう場を設けていただくことも大事なのですけれど、自分たちで「こういう機会が欲しい」と市民のほうから言うことも大切なのかなと、私は思います。

○大庭：川島さん、いかがでしょうか。自分のやっていらっしゃるほかのことでも、全般でも結構です。

○川島：皆さんのお話を聞かせていただきまして、一番の反省点は、私たちのグループは、市役所の方にお尻をたたかれながら毎月1回活動している状態です。取材した方の紹介も、市役所の方を通して取材している状態なので、誰を取材して、どういうことに興味があつて、何がしたいということを、一人ずつ自ら考えて活動しなければいけないと感じました。



○大庭：中村さん、いかがでしょうか。南から離れて、長久手市の全体を見渡したときに、今、先生のおっしゃったことで、お気付きの点がありますか。

○中村：今日は地域共生という言葉も入つて、皆さんでやっていこうということなので、地域共生について、先生から少しお話をいただいたことを含めながら、自分で考えてきたこともありますので、少しお話ししようかなと考えています。

まず、自分たちの地域のことは自分たちで決めて、決定していく、そういうまちづくり

をしたいなど。地域力ということは何らかの文書で読んだことがあります。その地域力の温度差はたぶんあると思いますが、南小連合会では、地域共生というテーマで、今度の10月にもありますが、暮らしやすいまちにするために、皆さんが笑顔で暮らせるためにというテーマを持ちながら、みんなで話し合っていくことが、非常にいいのかなと思います。

そのために皆さんが共通する意見を出して、先ほど言われました少子高齢化、共働き社会にふさわしいコミュニティの形成ができれば、よりいいのかなと思います。

地域共生ステーションは、いろいろな人の意見が聞ける場だと思います。居場所、皆さんが来るところ、その役割も、皆さんで決めればできるのかなと思います。だから、役割と居場所のある地域の活動拠点ができて、そこで活動していきたいなど、今は考えています。

○大庭：ありがとうございました。葛谷さん、いかがでしょうか。

○葛谷：私は先ほども言いましたように、まちの相談員という名前なので、最近、とみに、いろいろな方からいろいろなご相談を受けます。

その中には、ご近所でのトラブルがありました。皆さんもご経験があると思うのですが、近所やお隣同士だからこそ解決できないこともあります。分かってしまうといけないので具体的には言えませんが、市に「何とかしてほしい」と言って、市はそちらの方にお手紙を出しました。それを受け取った人は、「なんでうちが」「誰が言ったんだ」ということになって余計悪くなってしまうと思うのですが、今回は、私と、社会福祉協議会の地区の方に入っていて、一緒に訪問させていただきました。

トラブルの原因になっているおうちに行って、いろいろなこととお話しさせていただきました。そうしたら、実は、その人もそのことについて、どうしたらいいのか分からなくて困っていました。だけど、近所の人には言われるから感情論で言ってしまっ、ちょっと関係がこじれていますというだけのことだったのです。

こちらが間に入って、いろいろ段取りをして、この間、そのことが解決されました。私が感じて良かったと思うのは、その後、ご近所のお二人が楽しそうにお話しされていたことです。

それはたった一つのことなのかもしれないのですが、まちづくりってそういうことかなと思いました。無理やり、隣同士は絶対に仲良くしないとイケないと言われてしまうと、

どうなのだととなりますけれど、そこにどなたかが入って、仲を循環させていくと、実はそんなに大したことではなかったというか、良かったなということになれば、その関係も戻ります。

昔、いいなと皆さんが言っている、向こう三軒両隣です。そういうのも復活するというか、息を吹き返すのではないかというのを、この間、感じたところです。

○大庭：分かりました。ありがとうございました。

もう時間になりましたが、今日は長久手市みんなでつくろうまち条例施行記念シンポジウムとして、ここまで「ここから踏み出そう！わたしたちのまちづくり」ということで、パネリストの皆さんと話し合っていました。

最後に、小林先生、皆さんの意見を聞いて、短い時間ではありましたが、今後の長久手市のまちづくりについて期待を込めて、少しコメントをいただければと思います。

○小林：パネリストの皆さんのお話を伺っていて、熱い思いを持った市民の方が、この壇上に今いらっしゃるだけではなくて、たぶん氷山の一角という失礼になってしまうかもしれないんですが、たくさん長久手市にはいらっしゃるのだろうと、あらためて感じました。

いいじゃないですか。その思いをぶつけて、これからいろいろなことに取り組んでいただければいいなと思います。いろいろ活動をしていると、確かにいろいろと課題にもぶち当たりますし、悩みます。つらいこともあるでしょう。まだまだだな、私たち、ということもあるだろうし、どうやっていったらいいのだろうと困ることもあります。

なぜ困るのだろうという、たぶん自分と人が違うからです。自分の思っていることと、隣の人が思っていることが一緒ではないということです。自分はこうしたいと思っっているのに、隣の方は全然それを感じてくれないのです。なんでおまえは気付かないんだよ、鈍いなと思って、いらいらします。そういうことなのです。

でも、先ほど講演の中でも申しましたが、要するに人と違う、いろいろな人がいる、多様な人がいます。むしろその多様な状況、違うという状況を楽しんでください。「うわ、なんだこいつ、変わっているな」「あれ？もしかして俺のほうが変わっているのかな」とか、「こいつ、毎日コンビニに行ったら変人だと思ったけれど、全然コンビニに行かない私のほうが変人かもしれない」と。

先ほどの話ですよ。そういう違いを楽しんでください。違うからぶつかって煩わしい

のだと思うのですが、その煩わしさを、「これってすごく楽しい異文化交流しているな」「未知との遭遇だな」「未体験ゾーンに触れてしまったな」というふうにアドベンチャーだと思ったら、日々楽しく生きていけるじゃないですか。それくらいの心の余裕を持って、すぐに答えが出なくても仕方がないな、この人とあと3、4年も付き合えば、いずれ少しはお互いのことが分かるようになるのかなということです。

家族もそうではないですか。最初から完璧に全部のことが分かるわけではないけれど、いつの間にか古女房みたいなことになったりしているわけでしょう。そういうことで、じっくり長いことかけて、その違うというのを存分に楽しみながら、付き合っただけならば、20年後、30年後には、より一層幸せを感じられるような、すてきなまちになっていくのではないかなと今日感じました。

皆さん、今日はありがとうございました。

○大庭：先生、ありがとうございました。ご参加いただいたきましたパネリストの皆さん、ありがとうございました。短い時間で、議論は尽くされたとは到底思いませんが、この条例施行をきっかけに、私たち市民が、まちづくりに対して自分が何ができるか、何だろうかと少しでも考えてみるのが大切だと思います。

先生の先ほどの言葉でいうと、想像力をたくましくすることが肝心かなと思いました。このディスカッションはここで閉めたいと思います。ありがとうございました。

